

理念と独自性のある育成システムで国際的潮流に立ち向かう



国際教養大学理事長・学長

鈴木 典比古

すずき・のりひこ

1978年インディアナ大学経営大学院博士課程修了。国際基督教大学学長、大学基準協会専務理事を経て、2013年から現職。中央教育審議会大学分科会、大学教育部会委員、大学設置・学校法人審議会大学設置分科会委員等を兼務。

21世紀半ばに世界規模で展開する大学に求められる要素として、鈴木学長は「標準化」と「多様化」という2つのキーワードを挙げる。グローバル人材育成において、各大学がその両方をめざしつつ、大学独自の教育システムを構築することにより各大学の差異が保たれ、日本の国際的優位性を高められるとする。

21世紀に求められるグローバル人材の要件

学校教育が、社会に有為な人材を送り出すという目的を持つ以上、産業社会が変化すれば、学校が育成すべき人材像も変わらなければならない。

20世紀までの産業社会は同質的なものを大量生産、大量消費することで成り立っていた。それらを可能にするために、規律を守り、同じような考え方、行動パターン、価値観を持つ人材を育てることが学校に期待されていた。

21世紀に入って先進国を中心に、社会が多様かつ特徴のある製品、サービスを求めるようになった。それに伴って、発想力が豊かで、主体的に行動できる確立した個が必要とされている。さらに、企業間の競争や連携、市場の規模がグローバル化したために、世界で渡り合えるだけの素養も求められて

いる。これらを備えた者が、いわゆる「グローバル人材」であり、その要件を現段階（2010年代）でまとめると、図表1のようになろう。

率直に言って日本の学校教育は、この育成すべき人材像の変化に、まだ十分に対応できていない。高校までは規律を重視し、生徒に列をつくらせて、列を乱したものがいれば正していく。大学では、一教員が大人数を相手に画一的な授業を行う。しつけという意味

ではある程度の効果を挙げているだろうが、小学1年生からPBL型の授業をしているアメリカと比べるまでもなく、産業社会の現状に適合した教育とは言いがたい。

もちろん全ての学校が、グローバル人材の育成を最優先事項として掲げる必要はない。とはいえ大学に限って考えた場合、図表1の②～④のような能力は率先して育成すべきだろう。これら、ひと言で言えば「対話」の能力は、グローバル化を離れた場でも社会人として普遍的に必要なものであり、全ての大学で身に付けさせる責任がある。

一方、①、⑤の能力は、グローバル化が進むにつれてますます強く求められるようになる性質のものだ。多くの企業がグローバル化の波にのまれてい

図表1 2010年代に必要なとされている「グローバル人材」像

- | | |
|---|--|
| ① | 世界共通語としての英語の運用力がある |
| ② | 主体的に物事を考え、それを他者に伝えられる |
| ③ | 異なる文化や歴史を持つ人たちと理解し合い、自分の考えを伝えられる |
| ④ | 相手の強みを理解し、新たな価値を生み出せる |
| ⑤ | 国と国という関係を超えた地球規模の視点を持ち、既存の価値観にとらわれずに物事に挑戦できる |

る現状を考えれば、大半の大学・学部がこの2つの力を育成すべきだとは思いますが、例えば地域の介護に従事する人材を育てるような大学・学部では優先順位が下がってもやむを得ない。どのようなフィールドで活躍する人材を育てるのかによって、ある程度の強弱があってもよいのではないかと。

①～⑤の要件全てを満たした人材をコンスタントに育成できる大学はまだ少ないが、「スーパーグローバル大学創成支援」の進展や、リベラルアーツ系学部が近年、相次いで設置されている状況を考えれば、今後の人材増加に期待ができそうだ。多分に感覚的だが、全国の大学卒業者の1割が要件を満たすようになれば、日本の教育・社会を変えていけるのではないかと。

標準化と多様化で世界の潮流を捉える

現在、大学が育成している人材が社会の中心となって活躍するのは20～30年後。そして、現在行われているグローバル人材教育をベースに、30年後の2050年頃のこの分野の世界的潮流を予想すると図表2のようになる。そこには「標準化」と「多様化」という2つの方向性がある。

標準化とは、大学教育におけるさまざまな基準、ルール、しくみ等が国を越えて統一される原理に基づくものだ。各国の認証機関の連携、ナンバリングの国際標準化、EU内における共通水準の学位授与、AHELOのような世界規模の学習成果の比較調査といったものが整っていくだろう。一大学の中

図表2 2050年頃のグローバル人材教育の世界的潮流の基本的方向

| | | |
|---|---|--------------------|
| 1 | 国際的な大学間の教育コンソーシアムの形成 | グローバル教育の統合的原理(標準化) |
| 2 | 大学認証機関の国際連携 | |
| 3 | 大学による海外のジョイント・ベンチャー、海外直接投資、買収とキャンパスのグローバル・ネットワーク化 | |
| 4 | MOOCs等を使ったデジタル高等教育のグローバル・ネットワーク化 | |
| 5 | 教育内容の国際標準化 | 自国教育の多様性原理(多様化) |
| 6 | 国際間の学生流動化 | |
| 7 | 各国による自国社会・文化維持のための責任ある自国教育 | |

のみで教育が完結する時代から、世界中の大学間で協力、競争が行われる形へ変化していく。

既に現在も、留学生の派遣、受け入れを推し進めるためには、互換性のある科目を設定し、留学先の大学と自国のカリキュラムがシームレスに接続されないと、学びの妨げになるし、受け入れ先の開拓も進まないはずだ。

一方、多様化とは世界の多様性とそれがもたらす豊かさを保持するために国レベルで、各国が自国の社会と文化をしっかりと維持していく責任があるということだ。

世界的多様性の保持のために、日本が自国文化を維持する枠組みは、教育に関しては国策が多い。中央教育審議会では検討される方向や文部科学省で示される政策がそれにあたる。

21世紀半ばに向けて、各大学は標準化と多様化をバランスよく達成することを長期的目標にするとよい。世界に通用する、大学教育のグローバルスタンダードに則り、自学を選んでもらえるだけの個性的な教育をめざしたい。

国際競争における日本の大学の課題

標準化、多様化の潮流に立ち向かい、国際競争を勝ち抜くための日本の大学の課題を3つ挙げる。

1つ目は、学生の学習量の少なさだ。質的転換答申*の背景としても提示されたように、他国と比べて日本の学生は勉強していない。

解決策の一つはシラバスだ。主体的に学習するには、授業で何に取り組むのかを知っていなければならない。自宅で授業の準備をするにあたって、各授業の内容が明記されたシラバスは必須だ。そのほか、評価基準を学生に示す役割のあるルーブリック、学習履歴を学生と大学の双方が把握するためのポートフォリオなども効果的だろう。

2つ目は、教員の教育力強化だ。一方的な授業を聴いて、暗記をして、試験を受けるという20世紀型の教育を受けた人たちが、教員になって同じ方法を繰り返している状況が、まだ多くの現場に残っている。

アクティブラーニングなど双方向型の授業を導入し、教員と学生がそれぞれ一人の人間として対話する機会を日常化しなければ、個性を育むことは難しい。そのためには教員一人あたりの学生数を減らす必要がある。この点において、近年の、教育にける予算を絞り込む政策は、グローバル化に逆行していると言わざるを得ない。

3つ目は、教育施策におけるトップのガバナンスの強化だ。多くの大学で、学部・学科縦割りの運営がなされて、全学的な改革を妨げている。全学の教育プログラムを統括的に見る立場の人材もいないことが多い。学長、学部長、学科長が教学マネジメントの責任と権限を持つことが必要だ。各長は、建学の理念に沿った教育目標を明示し、その目標に沿ってカリキュラムの体系化を行うべきだ。

なお、国際競争における位置付けの目安として、各種の世界大学ランキングがある。ここでは英語で発表される論文の数が重要だ。多くの外国語の文献が日本語に翻訳され、日本語で研究できるという利便性が、日本の各大学の順位を下げてしまっている。標準化されたグローバル社会では、日本のこうした文化事情にかかわらず、ランキングの順位が大学を評価する際の一指標になる。この信憑性とは別の次元で、戦略的に教育・研究力の高さをアピールする貪欲な姿勢が必要ではないかと。

多様化・特色化によって人材育成にも工夫を

私はこれまで、学生の教育について、20世紀まで主流であった「人工植林型教育」を、「雑木林型教育」に変えることが必要であると唱えてきた。人工植林は、区画ごとに同じ種類の樹木を植えて育て、世の中に出荷する。このような画一的で個性に欠ける教育を、多種多様な樹木がそれぞれの方法で生い茂る雑木林のように、個性を尊重した教育に変えなければならない。

ここで学生に相当する一本一本の樹木を大学に置き換えることもできる。すなわち、大学の多様化という観点において、現在の日本の状況は人工植林的だと言えるのではないかと。

確かに近年の大学は、自学が果たす機能や3つのポリシーを決め、入試や授業の方法を変え、形としては多様化に向かっている。それらの取り組み自体は、いずれも必要なことではある。しかし、各大学がいっせいに、国の求めに応じてその枠組みの範囲内で、他大学の出方をうかがいながら歩調を合わせていくのでは、全国の大学が人工的に生み出されたいくつかの人工植林に分かれるだけで、真の多様化はなされない。

日本の大学が雑木林的な多様化(個々の大学にとっては特色化)を成し遂げるには、各大学が政策を受動的にトレースするのではなく、建学の理念や自学独自の伝統や強み、他大学にはない発想などを大事にし、ディプロマ・ポリシー、入試制度、カリキュラム、学内体制などに独自の工夫を加える必要がある。

このように各大学が国際的な教育水準を保証しつつ(=標準化)、自らの意志で他大学との差異化に努めること

(=多様化・特色化)が、高等教育全体の雑木林の多様化を促進し、ひいてはグローバル社会における日本の国際的優位性を高めることになる。

グローバル人材育成において新しいしくみをつくるには、現状の延長から始めるのではなく、まっさらな状態から始めるのがよい。国際教養大学は、それができて幸運だった。しかし、既存の学部がある中では、なかなか新しいことは始めにくい。その意味では、新学部や新学科を設置し、そこで成功モデルをつくってから、他学部・学科に影響を与え、底上げを図る方法もある。

留学を教育プログラムに組み込むなら、1週間や1か月では日本人同士で固まってしまうがらだ。短期講座ではなく1年間の留学にすれば、大学自体のカリキュラム改革にもつながる。1年間の留学後に日本の大学で学ぶ形となると、カリキュラムを外国の大学との間でシームレスにつなぐサンドイッチ構造をつくる必要が出てくる。このカリキュラム改革は、留学先の科目を置き換えても学位授与可能な「標準化」と、他大学の独自科目を履修させるといった「多様化」を併せ持った形が必要となる。カリキュラムの世界標準化につながり、21世紀の世界的潮流の方向にも合致する。

英語の4技能の育成は重要だが、日本人は「読む」「聞く」よりも、「書く」「話す」の力が弱い。自分の意思を伝える「書く」「話す」をより重視した教育が必要だ。

今後のグローバル人材育成には、これらに注力した大学独自の育成システムの構築に期待したい。(談)

*「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」p58(2012年、中央教育審議会)